

行發日五十月九年三十正大 刷印日十月九年三十正大 (行發日五十回一月每) 可認物便郵儲三第百三月三年三十正大

# 川柳雜誌

第一卷第八號



川柳雜誌 第一卷 第八號 (大正十三年九月十五日發行) 目次

選及び選者

麻生路郎 (二)

森氏の「誹風柳樽通釋を讀みて」を讀みて

武笠山椒 (二〇)

柳樽通釋の批評を讀みて

西原柳雨 (二二)

「川柳研究」の發行者に與ふ

遅日莊主人 (二三)

近作柳樽

麻生路郎選 (二六)

淺井五葉選 (二八)

伊東夜叉郎選 (二九)

高橋古城山共選 (三〇)

龜井花童子 (三一)

花童子記 (三三)

久流美報 (三五)

路郎生 (三七)

募臺所  
集子 猫粉  
句白

本社八月例會(青明忌)

第十一支部例會

路郎生 (三二)

二柳子居小集

二柳子記

路郎氏歡迎句會

戀さまく (二一)

助六居偶會

戀さまく

路郎生 (二七)

川柳塔

二柳子、美の作、輝翠、洲馬、彩霞、柳路、助六、雅幽、  
莢豆、夜講、古城山、徹底郎

川柳書架

震災のころ (二八) 駒井美の作 (三〇)

編輯室

(二九) 篠 (表紙畫自刻) 柴谷柴舟

近作

麻生路郎 (二一)

近作 麻生路郎

失職をしてから父の聲でなし  
畫の風呂泳ぐ氣にさへなる父よ  
子にやつた机で履歴かいてる  
紙屑に氣のない屑屋話し込み  
これ位にしきけき思ふ居候  
佛の日石につまづくころもち  
今日も又机の前の父であり  
子煩惱がつたんがつたんしてらし  
裏へ來いソラ無花果をみつてやろ  
ある時は子をだんばしでくひみめる



# 選及び選者 (一)

麻生路郎

## (1) 選に就て

私達が句作をした場合に、作られた丈の句を、全部新聞や雑誌に發表するものとしたならば、選といふ必要は起らないがそこには紙面の都合といふものがあるから必ず適當な句數に取捨撰擇を行はなければならぬ。一步譲つて、ぎんなに澤山の句數であつても掲載するだけの紙面があるを假定する。しかしその場合でも、出来るだけ佳句を發表して自己の作品又は發表する新聞雑誌の價値を大ならしめやうといふ欲望が必ず起つて來るものである。この場合にも又作品の選をする必要を感じるもの

である。そこで從來選といふことが行はれ、選者といふものが生れるに到つたのである。

然らば、その選といふことは誰がするかといふのに、自分でする場合と、全く他人に一任してしまふ場合と、自他の集合によつて選が行はれる場合と、他人の集合によつて選をされる場合とある。

今、その場合々々について説明をして見やう。

### 第一 自選

初學者でない限りは、自己の作品の長所と短所については、

自分が一番よく知つてゐる筈であるから、出来上つた句を一つ又は一纏めにして自己の批評眼に照らし、取捨撰擇を行ふ。これを我々は自選と呼んでゐる。

自選といふ事は右に述べたやうな特長がある。同時に一方では次のやうな缺點が伴ふものである。

誰しも人間には、自惚といふものがあるから、作つて間の句に對しては全く第三者の立場から觀て之が取捨撰擇を行ふことは頗る至難な事である。それ等の句を一々讀みあけて見ても、これは駄目だと思ふ句は至極少いもので、まあ、これなれば飛び切りいい句だと思はぬが、兎に角發表した處でよからう位に考へて、棄て惜みをするものである。

そこで他人の句を選る場合には相當嚴選し得られる人でも自分の句に對しては、かなり寛選になる懼れがある。もしさうした場合に自己の句を容捨なく棄て得るやうになれば自選といふことはいろくな選のうちで一番理想的なものであらうと思ふ。

が、しがし、それは決して容易なことではない。大抵の場合自選をするに、右に云つたやうな弊に陥るものである。比較的誤りの少い自選方法としては、作句した時、直に自選をなさず一日か二日經過してから之を行ふのである。その場合には、作句した時ほきに、菊石も塵には見ぬないもので、類句がありは

せぬかといふ點にまでも注意が拂へて、人によれば殆んど第三者の立場から選をすることが出来るものである。それは作句した時の苦心が幾分薄らいでゐるために、容易に句を切り棄てるこゝが出来るからである。

自選といふものは、ざつと右に述べたやうなものであるから極く初歩の人には不可能であるかも知れぬが、多少句に對して眼が出来て來たら誰でもやれるものである。と同時に、必ず自選はやらなければならぬものである。自選をして折角作つた句をビシ／＼棄てしまふのであるから無闇な句を作らなくなる。

誰でも無駄骨を折ることは決して好ましいことではないから、作句する時からして態度が變つて來る。一句一句自選をしながら句を作る、そして出来上つた句から更に自選をする。さうなれば、自選といふことを少しも考へずに作つた當時の作りツばなしの句は一段と優れた作品が出来上ることは云ふまでもないことであらう。

よく、席上で見かけることであるが、多數にさへ作つて置けば、きれか取つてくれるに違ひないといふ考へから、無闇に濫作をして披講者泣かせ、選者泣かせの句を多數に作る人があるが、それ等の作品には、川柳の常套語を使つて、片つ端から川柳の格好をした句を澤山作つてゐるのに過ぎなくて、特色のある句、考へさせられる句、敬服に値する句、こいふものは一句

もないのである。

だから假令(たとへ)それ等の句が數(かず)の上に於て多數(たふす)に入點(にらふん)したところ  
で、頭(づ)抜けた一句には及ばないのであるといふことに考へを及  
ばさなければならぬ。ところが多くの人は、さうは考へずに  
唯(ただ)席上(じやくじやう)で假令(たとへ)一句でも多數(たふす)に入點(にらふん)させやうといふ薄(うす)つべらな名  
譽(めい)慾(よく)から甚(いた)だしい人になる。選者(せんしや)當(あた)りみの句さへも作つて得意(ていぎ)  
になつてゐる人達(ひと)を見受けるが、これなほは大きな誤(あや)りだ云は  
ねばならない。

さうした他人(たにん)の聲色(こゑしき)を使つて、入點(にらふん)さといふことにのみ心を奪  
はれてゐる人達(ひと)は是非(ぜひ)も靜(しづ)かに考へて見る必要があると思ふ。

自分(じぶん)の特徴(とくごう)といふものを棄(す)て、選者(せんしや)當(あた)りみの句を作る人  
は選者(せんしや)の代作(だいさく)をしてゐるのと同(どう)等(どう)變(へん)らないのである。しかも選  
者(せんしや)よりも拙(ちやく)い句を作つたとしたならば、何(なに)のための作句(さくご)である  
か、わからなくなつてしまふ。

選者(せんしや)當(あた)りみのいふことについては、ある特種(とくしゆ)の場合(ばあひ)をのぞい  
ては先づ(まづ)やらないのがいふ。その特種(とくしゆ)の場合(ばあひ)といふことにつ  
てはあきで説明(せつめい)をするが、兎(う)に角(かく)席上(じやくじやう)選者(せんしや)當(あた)りみの句を作つた  
り、されか取つて呉(く)れるであらうといふ籤(せん)でも引くやうな氣持(きぢ)  
で、濫(らん)作(さく)をそのまゝに出句(しゆく)することは避(さ)げなければならぬ。先  
づ自分(じぶん)の作つた句に對(たい)して自選(じせん)をして、自信(じゆん)のある句だけを出  
句(しゆく)するやうにしたいものである。

それから席上(じやくじやう)では、多數(たふす)の人が集(あ)まつてゐる爲(ため)め時間(じかん)の都合(ごうご)  
や、選(せん)の都合(ごうご)で句數(くすう)を制限(せいげん)する場合(ばあひ)が多い。その場合(ばあひ)に與(あた)ら  
れた時間(じかん)内に制限(せいげん)された句數(くすう)が出來(き)ても時間(じかん)に餘(あ)りかへれば  
矢張り(や)作句(さくご)を續(つ)けて欲しい。三句(さんく)を制限(せいげん)してゐるから三句(さんく)  
作つたから、最早(まづ)自分の責任(せきにん)を果(は)したやうな氣(き)で、不必要(ふじやう)  
なことをしやべつて見たり、ボンヤリしてゐたりする人も見受(みうけ)  
けるが作句(さくご)は決して事務(じむ)ではないから三句(さんく)を制限(せいげん)されたから云  
つて、必ずしも三句(さんく)さへ作れば、その句(く)が、よくても悪(わる)くても  
いゝといふものではないのである。

しかし、句數(くすう)が制限(せいげん)されてゐるにもかゝらず、制限(せいげん)された  
句數(くすう)以上に句(く)が出來(き)たからきて、その全部(ぜんぶ)を出句(しゆく)することは、  
句會(くわい)道徳(だうとく)として見合(みあ)はさなければならぬ。いふのは、句數(くすう)に  
制限(せいげん)を附(つ)するといふことは、必ず(かならず)司會者(しゐしや)の方に都合(ごうご)があつてし  
てゐるのであるから、その點(てん)に考(か)へを及(およ)ぼさねばならぬ。それ  
を甲(か)が無視(むし)すれば、乙(おつ)も又(また)無視(むし)して遂(つい)には句數(くすう)制限(せいげん)といふこと  
が無意味(むじみ)となり、司會者(しゐしや)に對(たい)して出句者(しゆくしや)の思(おも)ひもよらぬ迷惑(めいわく)  
をかけることがある。

この場合(ばあひ)にも又(また)自選(じせん)といふことの必要(ひつた)が起(お)きる。制限(せいげん)時間(じかん)内に  
制限(せいげん)以上の句數(くすう)を作つた場合(ばあひ)には豫(よ)め自選(じせん)して制限(せいげん)句數(くすう)にす  
る必要(ひつた)がある。作つて間(ま)のない自己(じこ)の句(く)に對(たい)してさうすること  
は、かなりの苦心(くしん)を要(を)するものであるが、それは何人(なんにん)も經驗(けいけん)す

るまゝころであつて、その苦心あつてこそ始めて、眞に自己の句を見つめ得るやうになるのである。

斯うしたことを、繰り返してゐるうちに、自己の特徴をます

／＼あきらかに知るこゝ

が出来から自選といふ

こゝは決しておろそかに

出来ない。自選が充分に

出来るやうになれば、他

人から句の選を頼まれた

場合には餘程冷静な態度

で選が出来るやうになる

ものである。

席上で、自分の出句し

た句を忘れてしまつて自

分の句であつたのか、他人の句であるのか判然しない爲に筆蹟

を見せて貰ひに立ち上つて披講席まで來る人を稀に見受けるが

これなきは、兎に角作りツ放しのいゝ標本であつて、作つてし

まつた尻から自分の句を忘れてしまつてゐるのである。斯うし

## 青 明 の 面 影



た人達は、もう少し自分の句をみつめる。必要がありはすまいか。

同じ句に對して數回自選してゐるこゝ、最後に一句も採れなく

なつて皆棄て、しまふ場合が

あつたが、網には必ず魚がかか

つてゐるこゝは限らないのであ

るから、數回自選して採る句

がなくなつた場合には潔

く、みんな棄て、しまふだけ

の勇氣を持たなければなら

ぬ。

さうした苦心を繰返してゐ

るうちには川柳といふものが

ハツキリミのみ込めるやうに

なり、遂には自分の句をしつかりこ摺むやうになるものだ。

折角作つたのであるからこゝさいふ同情は、自分の句に對しては

特に不必要である。



# 近作柳樽

路郎

選

陰鬱な氣性でおます許嫁  
 御主人へだまされた譯申立て  
 もう一度念押しをいいて旦那去に  
 泉水を廻つて見るも久し振り  
 弟へやさしゆういふも女房なり  
 元氣よう障子開ける誰れも居ず  
 日を替へてお誘ひをする雨が降り  
 百萬圓御座候の店構に  
 さうかして出来ませんかをうるさがり  
 今までを水に流した寛大さ  
 さうさして戴きますご手をつかぬ  
 御氣嫌をうかいに來て灯がこもり  
 御隠居の癖は火鉢をかき廻し

同  
 大 阪 元 山

子が死んでからの木魚に念が入り  
 眞帆船帆見へる座敷へ招じ入れ  
 死にはつた旦那お茶屋に貸しがあり  
 髭置いてからヘルメットよく似合ひ  
 御針子のみんな同情寄せる記事  
 順帯に行水へ呼ぶ涼み臺  
 朋輩の日傘を借りて逢ひに行き  
 荒つほくはたきをかける十五六  
 デパートへ來る軍人は眺められ  
 手拭へ貝を包んで歸つて來  
 朝顔を癖へ遣はせる竹を指し  
 信用をし乍ら恐い夢を見る  
 夾竹桃牧師の家が匿れて居

同  
 神 戸 一 閑 子  
 同  
 神 戸 紋 太











# 森氏の「誹風柳樽通釋を讀みて」

武笠山椒

私の誹風柳樽通釋を出したのは、今更思へば、只自分だけの興味に關られし脇を見ない、盲目蛇的行爲で、實はよせばよかつたさいふ氣がするのである。況んや他人の目には、ごの位嗚呼がましく見わた事であらう。然るに斯道の大家森東魚氏は本誌第七號で、拙著に對して過分の褒詞を下され、そのみな

らず、句解について、懇篤詳細な意見を寄せて、著者の蒙を啓發して下された。私は、深く自分の淺學寡聞に恥入るゝ共に、斯道の先輩の胸の廣い親切な仕向けに、衷心から感謝して止まないものである。

森氏の示されたのは、一々金玉の意見で、別に辭を挾む餘地はない。私は之によつて、他日必ず通釋の本文を訂正する積りである。唯氏の御意見の中、一二疑問を生じた所があつたので此の誌上を借りてそれを森氏のお目にかける。之によつて再度の御示教を得る様になれば何よりの幸である。

(九六)ぬけた齒に禿のこぞる片ツすみ

これは私の書き様が惡かつたのであるが、私は此の抜齒の主は禿の積であつた。抜けにくい老人の齒よりも、禿の方が自然ではあらまいか。入齒としては又「抜けた」がらこ穩かで無い様な氣がする。

(一〇七)汐くみに所望の浪が打て來る

西原柳雨氏から下さつた意見の中には、所望々々の聲が浪の如く打寄せて來るの意味で有らうとあります。それでは、所望といふ詞は誠に穩かに解せられるが、全體の事實を考へて見ると、少し無理な點がある様です。又私の様な解にするこゝ所望がらこ變な詞になる。森氏の解にするこゝ、川柳としてはちこ人が好すぎる様な氣もします。如何なものでせう。

(四〇三)内にか言へばきのふの手を合せ

此の句は、全體の措辭句柄が親しみ柔かみがあつて、高利貸の催促なきのやうに思はれないのですが、如何でせう。

尙西原柳雨氏も、私信で懇篤詳細な御意見を下され私はそれ

によつて非常に啓發されました。筆序で甚失禮ですが、こゝに感謝の意を表して置きます。斯道の先輩諸彦は勿論、さなた

## 柳樽の批評を讀み

でも、通釋について御意見を寄せて下さる事を、切に御願申上  
けます。(九月二日)

山椒氏の柳樽通釋出で、噴々たる好評と共に二三柳家の評論

も拜聴したが實は私ら數十句異見を具して同氏へ送致して置いた先達て拜眉の刷再版の末尾に他の批評と共に登錄するに云つて居られた百樹兄からも同書に對する批評を物したから見て呉れみの御手紙は拜したれど何雜誌に出て居るかまだ今日迄接しせぬ只鯨 鉢 八月號に映絲兄と川柳雜誌八月號に東魚兄との二者を拜見した丈に過ぎぬ二氏の御意見と全く同一なるものは茲に云はず只首肯し兼ねる二三に就て愚見を述べて見たいと思ふ是も例の研究辭と御高恕あらんことを仰ぐ

借りのある家へ提灯紋盡し

派手な提灯と云ふ原解もつぎはぎのある古提灯と云ふ東魚兄の意見も二つ共に同意し兼ねる。是は大三十日の晩に色々な紋印のある提灯が押寄せるこの儀にて『御不勝手御臺所は紋盡し(文化)』は全く同吟である

ぬけた齒に禿のこぞる片つすみ

原解の花魁の齒、東魚解の老人の齒いづれも服し兼ね、私は、矢張り此儘乳齒脱落期の禿同士が、オヤ又脱けた、ドレ見せなま云つたやうな場合と思ふ

汐くみに所望の浪が打つて来る

山椒氏は詠へ向の波が打寄せるに云ひ東魚兄は繪畫的場面の讀美と云はるゝけれど是は此時代からボチ／＼據頭し來れる狂句式にて汐汲みを一曲踊れ／＼と云ふ所望の聲も浪に擬して汐の縁語に結んだ句案と思ふ

舞鶴に水を盛らせる殿づくり

舞鶴を原解には大厦の棟の形容とし東魚兄のは棟梁の裝束の見立とあるが實は私は今以て此句の上の「印を取兼てゐる」城地御見立の時西御丸より御本丸の方へ白鶴來り舞へり舞鶴城の名これより起れり「一」ある(書名逸)に照して此句を江戸城造營に考へては見たが元より駄勞解である少く共東魚兄が類句として擧てゐる、「白鶴規矩準繩の上を舞ひ」は江戸城の句と思ふ

大名は一年置に角をもぎ

國持大名が一年置に江戸へ參觀して威勢の角をもぎ取られるに云ふ映絲兄の解説は初耳である是は原解の通り御妾と奥様との角を隔年いたゞき折るで差支はなからうと思ふ

此稿の終りに一言を附して置たいことは山椒氏は主として沼波

氏の『川柳評釋』を参照せられた者、如く動もすればその誤解をば其儘承繼せられてゐるやと思はるゝ節もある様に思はる。

# 青明忌

八月九日夜  
於端の坊

藤村青明は大正四年八月二日に須磨の海岸で不慮の死を遂げた薄幸の詩人です  
死ぬ前夜大阪の句會に來て「晝顔は打揚げられた傍で咲き」の句を残してゆき  
ました。(五頁に青明の面影を掲載)

路即 古城山 啞人 松耶 浪花坊 紋太 柳骨 秋葉 助六 凡平 百石 眠聲  
駒入 蚊十 蝶哉 幽香 梅風 廣賀 順三 井而 津々 多門 徹底郎 常坊  
彩峰 双柳 刀三 光太樓 波耶 蝶二 馬行 蕭流 文久 かほる 長人 史風  
(參會者名簿より)

## 晝 (兼題) 麻生路郎選

投げられたやうに親仁の晝寢に 梅風  
憂鬱の晝を床屋へ行つて見る 刀三  
晝過ぎに亭主やつぱり戻つし來 同  
晝飯をうかみ忘れる腹になり 波郎  
いゝ晝寢起して無心纏まらず 古城山  
樂しみの一ツミ晝の風呂で逢ひ 啞人  
手拭を頭に晝のころもち 文久  
中庭を隔てた晝の催しもの 同  
他所ゆきの晝ちつほけな鍵を 幽香  
お晝からそろゝ起きる病上り 薫流  
面會をみんなすます晝になり 松郎

夜を晝に次いで花道倒れて來る 彩峯  
看護婦と藥局生と晝を待ち 蝶哉

## (佳)

我が影に心急がるゝ晝の宴 史風  
いつそもう晩まで言ふ座り 長人  
晝鳴いた雞の聲ゆるんで居 徹底郎  
色街の晝は端から端が見え 同  
正午正午獄屋の中も正午なり 波郎  
晝だから又來る言ふ將棋盤 紋太  
豆腐屋に未練が残る晝となり 蝶二  
(八)

食堂へ來い三越鳴らす様 津々

集金人今日の晝飯家で喰ひ松郎  
味氣なく嫁は眞晝の針を持ち馬行

## (地)

戀人待つ晝の間の長すぎる 柳骨  
突然も突然晝に灯がこもり 紋太

## (天)

晝の月もたいないほごうすいち 徹底郎

## ○

母親は日の落ちぬうち行けよ 路郎  
ひる深し女の顔のながみちか 同

## 姿 (席題)

相元紋太選

歩く姿は先妻をそのまんま 光太樓  
テノ舞の姿旦那のお氣に召し 凡平  
今日刑事ハツピ姿で門を出る 廣賀  
格子から後ろ姿を見て笑ひ 蚊十  
裾模様いつもの娘みは見えず 浪花坊  
うすものを着れば少し肩が張り 秋葉  
ほろ酔の眼にもろくの姿也 幽香  
(人) 後ろ姿へ言ひ過ぎたを知り 浪花坊  
(地) 摺れ合ふた姿に利久けつ 助六  
(天) 拗ねてるる姿に唾を見る 光太樓



### 第十二支部例會

七月廿七日午後六時半より函館市末廣町事務所樓上に第五回支部例會を開く。出席者は左記の十七名にして披露後五分間吟を作句して同十時半散會せり。(花)

ばん蝶、東魚、喜多坊、都れ尺、茶化子、田津尾、一樹、あづま、二三吉、利喜馬、潮三郎、里魚、笑劍坊、三津峰、八郎兵工、柳友、花童子

席題「眞夏」 里魚選

風船がひみ休みする蒸し暑さ 二三吉  
焼け砂へ昆布を這はし海を見る 茶化子  
撒水が無駄だま云つたやと照り 花童子  
配達夫 暑中見舞を束に置き 里魚

同「醬油」 利喜馬選

むらさきが足ら刺身に手を叩き 花童子  
洗ひ張り醬油の汚みがまだ残り 潮三郎  
冷麥の汁だんぐに薄くなり 喜多坊  
婦長フト無駄な醬油に眼が屈き 潮三郎

同「窮屈」 笑劍坊選

観世流そつご額の汗を押し 潮三郎  
四つ辻の店三角の棚も据ゆ 柳友

大人場つくく金の値を悟り 花童子  
ブレーキを礎すに邪魔な満員車 喜多坊  
座布団へ袴のヒダが崩れ勝ち 潮三郎  
足の痺れた吐言なき聞いて居す 東魚  
手の上で書くペン先で穴があき 一樹  
電車から降りて包を結び替へ 柳友

同「動」 喜多坊選

物思ひフト我影に總氣立ち 東魚  
二アつに切れても断脚動いてる 笑劍坊  
用水の中にも世界動くもの 潮三郎  
流れてく水の心になり切れず 東魚  
冬の蠅俺の命を考へる 笑劍坊

同「色」 花童子選

表現派ベタく塗つて山になり 茶化子  
血が燃ゆるやと槽火が赤く映ぬ 東魚  
水菓子屋タングステン灯のあづま 柳友  
物思ひ爪の色さへ氣に入らず 東魚  
傷口のやうなザクロの割れた色 八郎兵工  
いつ仕入れたの齒磨の色が褪せ 花童子

### 二柳子居小集

八月八日午後壹時から拙宅で同人小集會を開催しました。夜の十一時すぎまで路那先生を中心にして柳談に花が咲きました。(二柳子)

出席者 路那、輝翠、一洲、助六、芦穂、徹底郎、かほる、英豆、一聲、二柳子

鱗 路那選

鱗持つ魚こは刺身見わた居す 芦穂  
鱗さる魚に亭主もおりて來ら 同  
あたらしさばかりりくさいふ鱗 同  
筒切りの庖丁鱗にチトニり 輝翠  
手料理の鱗に愚痴はチト控へ 同  
鱗汁だけを吸ふのも病み上り 同  
畫網のザルを鱗のまゝ返し 助六  
割烹服顔の鱗は氣がつかず 同  
流し元乾いて鱗反つて居り 同  
夢で見た鱗さつちり並んで居 徹底郎  
橋で見え鱗ゆつくり 翻り 同  
隣席の鱗に動く目付なり 一洲  
雞喉巻から鱗をつけて戻るなり 二柳子

○



仰山に鱗を飛ばす誕生日路郎

日射し 互選

静物のその半面によい日射

水車日射へ傘の柄がながし

船窓の日射疊に落ちつかず

茶をたてる障子ハット良日射

三越の五階六階暮て居ず

牧場の柵へのんびりした日射

本堂の中段までも陽かはり

あんまりな陽射へ立てる四枚折

盆栽へ格子を越へた陽が當り

暖麗の風に陽射しが少し揺れ

寝返りを打てば陽射が顔へ来る

かけつたま氣づいたか猫伸び

もういゝ云ひたい秋の日射

掛軸から椽へ日射はもう歸り

中の間の日射しの中へ戻つて來

ブルドッグ日射しの中に生てる

節穴にサーチライトを見る朝寝

光る蠅日射しに足をすり合せ

鏡月に車掌は暗く鉄入れ

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

障子洩る日射に蠅はよく遊び

海水の留守の日ざしを母案じ

流連へ意見の様に日が照らし

二階から日射へ水を撒いて居り

息 互選

息せき切つて腕白歸つて來

一息にお飲みみ母の氣はあせり

横町へ折れるま車夫の息をき

牛の息眞ツ暗かりて近くき

溜息ま一所に財布投げ出され

溜息を女房の方はみのがさず

一人寝て自分の息をきいてゐる

電報をうたうかさいふ息づかい

子の寝息きひて用事が殖ゆる

手前から息をころした忍び足

息苦しそな返事を刑事聞き

首筋へ息かけられる人だから

神棚は息吹きかけるまこでなし

かたまつてメダカが息をひそめる

もう一息のま拍手のかけになり

受太刀ま見える舞臺の息づかい

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

浪花節客をぢらして息をつぎ かのる

### 路郎氏歓迎會 (金澤)

於「遊月」及「オヤマ食堂」

八月一日午後六時より味噌藏町貸席「

遊月」に於て、來澤せる大阪の川柳雜誌

社主幹麻生路郎氏及び同人橋本二柳子氏

の歡迎會を開く。

出席者は左記二十二名にて近來になき

盛況。

先づ兼題「夏」の外に席題「辨當」を

課して作句數刻 兼題は路郎氏の選を煩

はし、席題は銀波樓氏選をして九時作句

を終へ路郎氏の披露に先だち數十分の座

談的に現代川柳の主張を述べられた。銀

波樓の選句は久流美代披して句會を散會

し更に有志十九名は二氏歡迎の懇親會を

十時より麻畔オヤマ食堂に開く。新調料

理にフォークの音も仲睦じくビール酌

を抜く。柳談つくるまころを知らず、斯

くて散會は夜の十二時過ぎ(久流美報)

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

# ▲一周年記念號

## 募集課題(第二卷)

(第一號)

記念號(大正十四年一月) 計劃を左の通り發表いたします。

▼金庫(二十句以内) 吉川 啞人選

▼松(同) 竹田 蘆穂選

▼店先(同) 高橋 古城山選

▼弟(同) 柳川 洲馬選

▼旅人(同) 編井 花童子選

▼牡蠣船 塚崎 松郎選  
神崎 一閑子選

句稿締切十一月二十五日限。各題の天位に川柳雜誌一箇年分、地位牛ヶ年分、人位三ヶ月分を贈呈いたします。但し同一人へ入賞した場合には高點の一方のみに賞品を送ります。

▼川柳家失敗談 編輯局選

川柳家失敗談は自分の中でも、他人のでもよるしい。文章の長短は制限しませぬがなるべく短かくて、面白く讀める範圍のものを募ります。

掲載した分に對しては全部薄謝を呈します。

夏の陽にそむいて髭の撒水夫 同

母一人夏を苦にするのが目立ち 路郎

京の夏河原を一寸歩かされ 同

## 助六居偶會

八月廿日夕駒人君が訪れて來られたので  
廣賀、秀人兩君を招いて私三人で作句  
する。

組、息子、髮結、筏

大掃除組のまゝ、箸を入れ 駒人

傳票は息子でないミ分らない 助六

意見中息子へ電話かゝつて來 駒人

南海で息子車掌を勤めて居 廣賀

逆らつた波に筏は沈みさう 廣賀

コダックへ納めて歸る筏舟 秀人

嫁に行く事を髮結知つて居り 駒人

遠慮なく髮結座敷まで通り 助六

髮結に話しの様に問ふて見る 同

髮結も手傳つて居る俄雨 同

(句會出席者) 路郎、二柳子、銀波樓、楠

山、眼隠子、紅法師、喜花、兎絲子、光林坊、

庄之助、漁村、紅の花、露月、銀砂子、柊花、

詩郎かへで、麻畔、夢雄、民部之助、旭洋、

藤の花、朱格子、久流美(二十四名)

夏 (兼題) 麻生路郎選

生活へまた夏が來る冬が來る 眼隠子

夏瘦になんのかんの三好い噂 同

梅を干すのに安心な空模様 詩郎

病む身にて軒の葱に水をやり 庄之助

もう夏になつたさ蟬の話なり 兎絲子

こつそりこ來て氣の毒蚊帳の中 旭洋

腕時計跡こつくり夏はやけ 紅法師

夏の汗だけに奪い氣になれず 銀砂子

夏やせを隣の人には知らすなり 二柳子

夏休み兄ミ違つた趣味を持ち 民部之助

帯皮に今日の暑さの汗が泌み 喜花

氷柱へお客は一寸さわつて見 銀砂子

日盛りを萎涼しい湯の歸り かへで

灯を消して蚊帳に涼しい人ミさ 漁村

當のない金策に出て貸浴衣 同

潮れずば海に踊つて見たい夏 久流美

# 戀さまさま

路 郎 生

▽昔の句と今の句△

そんな事存じませんこ鶴を折り  
握られた片手疊をむしつてる  
抱いた手に叩かせて見る惚れた人  
愛想のよいを惚れたこ思ひ  
びんづろの撫でこころを戀の願  
其の手代其の下女晝は物言はず  
そつこあく戸の内外の面白さ  
惚れた奴児ぐるしい程使はれる

古句  
同  
同  
同  
同  
同  
同  
同



心太喰ふ淋しさ惚れられて  
いつ来てもおんなじ着物きて戀  
人知れず覗く寫真こなりにけり  
伯母の眼を邪魔扱にする娘  
本意なくかへすは先で添ふ氣  
母が来てかくす手紙の長すぎる  
振向けば君も小さい並木路  
思はじみするには金がありあり

柳珍堂  
日車  
蘆穂  
輝翠  
零骨  
一聲  
一葭  
路郎



昔の戀の句を讀むと、随分露骨な  
のがある。「さつむぐ言はぬもの  
だこにじりより」惚れたこは女のや  
ぶれかぶれなり」の如きはまたく  
手ぬるい方だ。一雨には又鶴を折つ  
たり疊をむしつたりするやうな初心  
な戀もあれば、一步つき進んで抱  
いた子に惚れた人を叩かせて見るのも  
ある。愛想のよいのを惚れられたこ  
思ふ自稱色男もあれば、「びんづろの  
撫でこころなき戀の願」等遠觀し  
た觀方をしてる人もゐるから面白  
い。

今人の句で戀の句を探がして見た

がさてこなるこ、なか／＼見當ら  
ぬ。日車氏には可成澤山戀の句があ  
つた。有りさうで一才見つからなか  
つたのが水府氏であつた。日車氏の  
「いつ来ても」は中年の戀を描いて  
尤も巧みなるものである。柳珍堂氏  
の「心太」にはしんみりこさせられ  
る。一聲氏の「母が来て」は「かくす  
手紙の長すぎる」で人物がよく出て  
ゐるこ思ふ鬼に角、斯して昔の句こ  
今の句を並べて見こねらひごころ  
の全く違つてゐるこに氣づくでせ  
うとして昔の戀の句は全部客觀の句  
で、樂々こ詠んでゐるが、今の句に  
は主觀の句が多く、それ等の主觀に  
は現代人が共通的に持つてゐる一種  
の淋しさが流れてゐるやうに思ふ。

募

集

句

臺所

淺井五葉選

川柳書架 (五)

誹風柳樽拾遺

(今井卯木校訂)

臺所の隅にも一つカレンダー 東城子  
 目見得のひ下女臺所廣く見る 凡平  
 臺所鼠を捕つた騒ぎなり しける  
 臺所へしなびた茄子が落ちてる 夢六  
 大根を切る臺所の派出な音 助六  
 附馬を待たせて這入る臺所 一洲  
 もう濟んだらしい臺所の水の音 美濃守  
 二階借上つたミコが臺所 小蔭  
 臺所へ電氣を吊つた忙がしき 月の輪  
 臺所瓦斯温和しく煮の上り 零骨  
 臺所の方も酔つてる目出度い日 論笑  
 手傳に來て臺所も略わかり 不越  
 庖刀を明日は研ぐ氣の臺所 十字路  
 何所様も同んなじさいふ臺所 同  
 臺所へ來て魚屋は汗を拭き 琴月  
 こつそりミ捨てるにきめる臺所 同

臺所の隅に何やら光つて居 左馬  
 い下女が來て臺所を明るくし 同  
 味噌を摺る者は味噌摺る臺所 寸馬  
 臺所の女將大肌脱ぎで居り 同  
 臺所へ悠々鼠出て歩き 二三吉  
 臺所で下女あつさりミ飯が濟み 同  
 臺所濡れ手で膝の敷をよみ 一柳  
 出棺の後臺所だけの音 同  
 臺所女中はいつち後で喰べ 廣賀  
 負はれてる子を臺所から下したり 同  
 臺所漬物石を置いた音 徹底郎  
 臺所を見て敵奴に叱られる 同  
 冷蔵庫臺所近く据られる 三栢子  
 氷割るのに臺所へ母は立ち 同  
 臺所で水かけられる炭俵 同  
 臺所へ來るミ師匠も打解ける 輝翠

▼卯木氏の「校訂を終りて」を一讀すれば本書が、こんな本であるかがわかる。  
 『本書刊行の因縁に就ては、坂井久良岐氏、花園百樹君とが、其序文で詳しく叙べられて居るから、自分は校訂者として、讀者の參考に資する事項を列記するに停める積りであつたが、其前に自分が本書を再び校訂するに至つた近因を述べたいと思ふ。  
 凡そ柳書の原本を繕くものは、其の落丁の多いのミ、誤字脱字、さては蠹魚に蝕はれ、原版の齟齬なきにて判讀に苦しむ文字の、鈔からぬに驚くであらう。  
 『柳多留拾遺』は「柳樽」の如き異本は見當らぬが、落丁も誤字も脱字も「柳樽」に譲らぬほご多くあるので、明治四十三

臺所の方へ晝寢の足を向け 同  
 臺所へ玩具を規律なくならべ 同  
 臺所でする挨拶の氣軽なり 同  
 嫁が来てからは臺所艶か出る 同  
 臺所胡瓜を刻む音に暮 同  
 馬行  
 お家はんに味見を頼む臺所 同  
 臺所へ何處の犬だか這入つて來 同  
 臺所滑つた皮を掃いて捨て 同  
 同  
 今貰ふたお芋が轉ぶ臺所 同  
 臺所の音を店から音を立て 同  
 臺所返事しながら手は動き 同  
 臺所で旦那はでかい尻を見る 同  
 臺所大の男も口に負 同  
 臺所一氣呵成の音を立て 同  
 佳  
 臺所で蚯蚓鳴く夜を淋しがり 三拍子  
 鈴の音子猫きこかに居るらしい 二三舌  
 旦那は別に子猫は可愛がり 村夫  
 猫の子を上げて得意が一人殖ぬ 彌生

子猫

お土産は先づ臺所で擴けられ 輝翠  
 母親はもう起きてゐる 臺所 彌生  
 臺所の火鉢で八百屋つけてゆき 寸馬  
 臺所コトリもせず月がさし 莢豆  
 婚禮の其日臺所狭いなり 一休  
 臺所此庭履の重い事 十字路  
 人  
 臺所晝の日に蚊に喰はれ 徹底郎  
 御無心に來て臺所の冷を知り 輝翠  
 臺所われた音から森さなり 馬行  
 地  
 臺所は落着いてゐるささむなし 三拍子  
 臺所午後は静かなさになり 助六  
 天  
 臺所半の音も夜さなり 十字路  
 伊東夜叉郎選  
 い顔の子猫は直に貰はれる しける  
 横飛びに飛んで子猫は腹を立て 左馬  
 身を揺る見る間に子猫驅り行き 一休

年初めて本書を校訂する時、百樹君秘藏の『古今前句集』を借りて底本さなし岩崎半魔氏の『川柳大全』江原鹿鳴庵主の『柳多留拾遺』と、自分所蔵の『類題詠風柳樽』を、丹念に對照して、一紙半葉の落丁なき稿本を作ることを得た。誤字や脱字、判讀に苦しむ文字は、西田富百君と渡邊虹衣君の力を藉りて、是れも亦完全なものにするこゝが出来た。斯の如くにして書いた苦心の原稿も『青柳』の廢刊と共に、散逸したものののみ諦めて居た。折ふしは單行本として梓行したいとの念も起つたが、上記の苦心を繰返す氣魂も失せて、荏苒今日に及んだ、然るに惠那岐川君が十年の久しき愚稿を大切に保存せる旨を報せられたので、自分は其情誼の厚きに感じ、意氣地なき自分の身を恥て、吉報を得た其日から改訂の準備に取り掛つた。本書は實に前述の如き原因に據つて、再び校訂するに至つたのであるが、自分

子猫もう赤い手毬に飽きが来る 凡平  
 また動く鼠に子猫ちこ愉け 月の輪  
 住職にこはり子猫飼ふつもり 三拍子  
 ゴム毬を子猫餘ッ程持て餘し 小人  
 二三遍ふんで子猫へ鈴をつけ 論笑  
 懐へ入れる子猫脊へ廻り 同  
 捨しに行く子猫あまり素直 同  
 おけいこにしたを子猫の首へ 同  
 撰り取りをされて子猫は貫は 一閑子  
 お座敷に子猫が轉ぶ茶屋の晝 同  
 帯しめる通り子猫は廻つて居 同  
 捨てられた子猫へ子供二三 同  
 御用閑子猫の世話を頼まれる 廣賀  
 呉服屋は小猫下して巻きはじめ 同  
 子猫もう一人前に伸びをする 一柳  
 叱られた所で子猫ちこまり 同

# 白粉

古城山選

白粉の膝を叩いて立ち上り 零骨  
 白粉をつけて末つ子笑はせる 夢六

腹立て、居るのを子猫知らぬ 零骨  
 もんきりを打つて子猫のあま 同  
 蓄音機子猫一目散に逃げ 徹底郎  
 子猫また犬に追はれて歸つて來 同  
 懐の温みへ子猫貫はれる 輝翠  
 しきるまで來る子猫二度轉び 同  
 猫の子は猫の子デツミ耳を立て 俊坊  
 ざれかゝる子猫へ親はチト怒り 同  
 呼び聲を子猫少うし聞き分ける 同  
 人通り子猫こわく見てるなり 助六  
 子猫上げます子猫古屋の格子 同  
 水溜りそこから子猫引返し 同  
 拜殿を社務所の子猫驅け廻り 同  
 三郎と呼ばれて出たは子猫なり 同  
 子猫二匹真圓い眼で撮て居 同  
 油断せぬ眼で子猫くわへてく 同

# 高橋古城山共選

白粉が落ちる薄い眉毛なり 論笑  
 ちも厚く塗つて嬉曳家を出る しける  
 白粉の合せ鏡に眼が据わり 一洲

は昨秋震災の砌、柳書の大半を失つたので、又もや百樹君の原本を借り、缺部磨滅なきで不明の句は素より、聊かでも疑問の句は、同君を煩はして、飯島花月翁所蔵の原本を調べて貰つた。  
 囊に當百、虹衣二君の力を藉りて、完璧のものとなつた稿本を、更に百樹君と花月翁の力を仰いで、嚴密に改訂したのであるから、決して謬りはないと斷言したい、殊に校合は斯の道に經驗ある岐川君が、専念努力せられたのであるから、之れも決して誤植はないと言ふを憚らぬ若し誤謬、誤植があれば、それは最後に校正した自分の罪である。(中略)本書は總し原本の儘にしたい希望を、悉く假名遣ひを改め、語音を正しして却句意を誤らぬ恐れがあるので、略字も態々彫刻して成るべく原本に倣ふことにした、唯漢字の甚だしき誤り、假へば、櫛を、櫛に間違つたのは(二頁五行)だから船逆櫛にして同じ哥(櫛)の如く訂正した

たしなみの白粉がらち濃う過ぎ  
 い、面の皮へ白粉塗つて来る  
 妹は、只まつ白に塗るばかり  
 塗過ぎた顔で夜店へ誘はれる  
 白粉の刷毛へ今宵の氣がにぶり  
 襟垢へ白粉、妙な色に付き  
 白粉を廢めて母親らしく成り  
 落籍されて白粉やけがち目立  
 新妻にそんなに塗るなとも云  
 無雜作に脇息白粉紙で拭き  
 學校へ来て白粉のよく目立ち  
 白粉も付けず不幸な娘に育ち  
 假裝室白粉瓶が轉けて居り  
 棧敷からの風白粉を香はせる  
 諦めて白粉落す午前二時  
 白粉も塗らず拗ねてる日が續き  
 白粉もつけず内氣な娘に育ち  
 合宿所白粉の要るこが出来  
 出戻りの白粉がちこ憫れなり  
 棧敷から紙白粉が軽く散り  
 (佳)白粉に見るく女出来上り  
 徹底郎

白粉ののらない宵の雨をき、  
 粉白粉ボツミ氣分のまゝに付け  
 (軸)戀を知る頃白粉の香も馴れ  
 白粉が襟へ染んだ女工なり  
 白粉も入れて湯治の荷が揃へ  
 塗つてゐる間に電話二度かゝり  
 下車譯が近く白粉紙を出し  
 濟まないと思ふ白粉塗る日あり  
 汗しらず坊も白粉つけました  
 新妻へそんなに塗るなとも言  
 朝つから遠出忙はしく塗り塗り  
 落籍されて白粉焼がらち目立ち  
 停電に白粉の香の高い事  
 無邪氣さは白粉つけて見に来る  
 白粉の瓶そのまゝに娘病み  
 書留へ白粉の手で判を捺し  
 法界屋せめても云ふ顔を塗り  
 のびて来る白粉胸でほかされる  
 白粉もつけず内氣な娘に育ち  
 徹底郎

花童子選

一三吉  
 茨豆  
 古城山  
 輝翠  
 同  
 蚊十  
 美濃守  
 三拍子  
 同  
 同  
 同  
 一三吉  
 月の輪  
 徹底郎  
 廣賀  
 一閑子  
 彌生  
 徹底郎  
 不越  
 一閑子

(以下誤字脱字その他につき多数の例を  
 あけて校訂の如何に忠實に行はれたるか  
 を示しあるも紙面の都合上之を略す)  
 以上、誤字、脱字、並に缺字等に就て  
 参考になるべき事項は、大略述べ終つた  
 が、慾には最後に列記した判断に迷ふ句  
 其他の遺漏や、解釋に苦しむ句の略註を  
 も掲げたいが、斯くては猶ほ幾多の時日  
 を要するのミ徒らに冗長に失するのを避  
 けて遺憾ながら、茲に筆を擱くことにし  
 た。大正十三年横濱開港記念日今井卯木

▼本書の目次は左の數項である。  
 原本の佛二葉(コロタイプ)校訂柳多  
 留拾遺の序(阪井久良岐)校訂柳多留拾  
 遺の序(花岡百樹)校を終りて(今井卯  
 木)古今前句集の序 原序、凡例、誹風  
 柳多留拾遺 川柳大全に就て。

▼大正十三年八月十日發行。菊半截和綴  
 四一二頁。定價二圓。發行所は岐阜市金  
 屋町二丁目柳書刊行會である。

▼本書は古句研究家必携の書である。

# 「川柳研究」の發行者に與ふ

遅日莊主人

川柳研究會主事足下。

足下は「川柳研究」第一卷の巻頭に次のやうな趣意書を發表されて居りますが、一體川柳が判りなのですか。

川柳研究會創設の趣意

世間には可成り澤山に古川柳新川柳の愛好家がありますが、遺憾ながら斯道に關する先進後進を指導する適當な機關雜誌がありません、隨つて初心者の指導、研究、作句の批評、句に對する趣味、賞玩又は同好者相互間の連絡等が絶つてゐて斯道の普及進展を見るこゝが充分に出來ぬ次第であります。それで一般斯道研究者の甚だ遺憾とするところでありまして、小生不肖を顧みず茲に本會を創設いたしましたのであります。

もよより其の器にあらざる不肖如きもの、到底能くするところではありませんが、幸にも新古川柳に能く精通されたる

世既に斯道新進の曉星としての評ある小橋小柳庵先生に請ふて本會發行の「川柳研究」雜誌の主筆兼選者として推戴し本會員の研究指導に努め、また本誌の面目を柳界に躍如たらしめ、全國に亘り同好の士を募りて「川柳研究」誌上に於て同好者の相互の斯道研究の指南車として一道の光明を輝かし、又世にかくれたる斯道の大家を廣く世間に紹介するこゝに致したのであります、さうぞ皆さんは本會のこの趣旨に翼賛せられまして、速かに御入會下さるやう創刊發行に際してひこへにお願ひいたします。

大正甲子十三年八月二十日

創刊發刊の喜びに充ちて

信誠社出版部

川柳研究會主事 阿部 會

號 華 柳 庵

敬白

私達はこの眞面目臭つた趣意書を読んで、出版屋さんとして、あまりに川柳會のこゝにも、川柳にも無智識なのに呆れたのであります。全然營利的でもなささうなので一面氣の毒にも思ひました。

私達は「川柳研究」さいふ名に多くの期待をもつてゐました「川柳研究」三名乗るからには「古川柳」も現代川柳にも相當理解のある人の經營であらうと思つてゐました。ところが私達の前に突きつけられた「川柳研究」は全く川柳に對する理解なき人によつて發行せられ、川柳を全然知らざる盲目蛇的選者によつて選をせられてゐるのに一驚を喫したのであります。

選者小橋小柳庵氏の全然川柳を御存じでないこゝは懸賞應募の天地人の三句も古川柳の燒直しや頼句であるこゝに御存じなく、しかも地の句「若夫婦簞笥の鏡に紙を捲き」の如きは未番句の「新世帯畫も簞笥の鏡が鳴り」から思ひついた



句で、しかも拙悪な句であります。五客以下一句として佳句がありません。一々例をあけて説明を要しない程川柳になつてゐないので、それに無断禁載としてある「川柳の作り方」に至つては全く噴飯の至りです。「………初心者指導のために添作、改作等を一句毎に實例を擧げて誰にもよく判るやうに説明をして一般川柳研究初學の士の便益に資するこゝにしたのである」なきも、よくもあつてかましく云へたものである。

## 一 添作改作振りを紹介する

### 題 花嫁

初対面花嫁の顔が近すぎて 某氏作  
「なか／＼輕妙で餘韻があつて上品で美  
感のあるいゝ句である、しかも少し描  
寫の上に洗練して句に枯れたところがあ  
つて欲しいと思ふ」を述べ

花嫁は疊に見せて物を言ひ 小柳庵

「かうした方が句に曲が面白味があつて  
又相當に考へさせられる餘裕があると思

ふ、斯う云ふところに作句の上の妙味が  
ある」を述べ更に「娘」さいふ題では、  
「箱人の娘にはいつか虫がつか」某氏作  
「これもあまり平凡に過ぎて、川柳特有  
の諷刺かはつきり表現されてない、讀ん  
で見て頭腦にピンミ來ない」といひ「箱  
人にしたで娘に虫がつか」小柳庵「かう  
して見るに警句を踏いでるので、川柳  
の特色が現れて來ると思ふ」箱人にした  
で「の」したで」が利いてゐる」なきも  
云はれておるのは寧ろ滑稽を通り越して  
ゐる。

まア、さつと右の調子である、小柳庵  
さいふのが川柳は知らぬが著述が飯の種  
だから止むを得ずやつたさいふのであれ  
ば恐るる點もないでもないが、それにし  
ては専門家に對して著述家道德だけは守  
られたらよからうと思ふ、もしほんみに  
研究する積りなれば中野町には西原柳雨  
氏のやうな古句研究の大家がゐられる筈  
だ。私達は「川柳研究」に對して何等の思

怨はないが、狂句を川柳にく／＼宣傳さ  
れてはほんこの川柳のために、誠に迷惑  
千萬だから此の際選者や執筆者を相當の  
人に求めるか、いさぎよく廢刊して貰ひ  
たい。

私達は、ほんこの川柳を社會に宣傳す  
るこゝに、初心者の指導のために大きな  
犠牲を拂つて雑誌を出してゐるのである  
から「川柳研究」の第一巻に對して黙つ  
て見てゐるわけにはいかないのである。

私達の目的から云つても世の中に川柳  
をほんこに理解し研究する相當の雑誌が  
出るこゝは双手をあけて歡迎するのであ  
る。私達は營利的に雑誌を出してゐるの  
ではないから、世間によくある商賣敵視  
して、貴下の發行された「川柳研究」に  
ケチをつけるものではない。この一文は  
單なる攻撃ではなくて「川柳研究」發行  
者たる貴下の反省を促すために書いたの  
であるこゝを申添へて置く。

## 編輯室より

▼いつの間にもやら秋になつた。英豆君がやつて来ては、コホロギがさうだの鈴蟲がさうだのミ、生活からズンミかけ離れた話をやつて行く。暑い間に二三なまけてる川柳塔の人々も、燈下親しむべき季節になつては、ボツ／＼句作に脂が乗つて来たらしい。近作柳樽も募集句も、これから大いに賑ふだらう。

▼社では観月句會を葛城山上(三千尺)でする計劃で美の作君(山登りの札付)ミ永見氏(大阪アルコー會の幹事)ミがヤレ天幕がさうだの、ハンゴで飯を焚くのミ折角骨を折つてくれてるが、本誌の編輯・校止・發送準備、本社の大掃除ミ次から次に用事が續出したので、お流れミなつてしまつた。ソレで幹事二人だけ何處かへ行つて貰ふことにした。

▼山口支部は柳川洲馬氏の一大飛躍で八月三十一日の天長の佳節に第一回支部會



## 川柳塔

橋本二柳子

玩具屋の虎だけ首を振つて居る  
 店先へ朝顔を出す午前中  
 佛壇へ子を連れて來る一週忌  
 一乗井戸一面にひッくなり  
 そら豆をだん／＼へす作業服  
 欄干に一人はく／＼の字形になり  
 飴賣の眼を子供が覺ねて來る  
 ○ 駒井美の作

宣傳書紀文が遊ぶ氣で散らし  
 市松も障子に張るミ菊を植ね  
 上氣した顔で花の日賣りつける

眞珠ほぎ落ちて丸薬よく光り  
開墾地石を堀りく唄になり  
白襟を着るミ姑少し塗り  
好い客さいふのを雛妓悲しがり  
道普請暮るミケチな灯を點し  
炎天に鍛冶屋一軒火を起し  
嫁の愚痴和尚からく笑ひのけ

森田輝翠

見送りをはらくさせて飛び乗れり  
誰何した方でも少し氣味悪く  
冷評して呉れるな子供ある仲だ  
ちミ禮を缺いで脛から風を入れ  
斯うしては居られぬ草鞋の紐を締め  
只末の世話を頼みに子を育て  
もう俺は駄目だミ思ふ損に會ひ  
駕屋まだ肩ミ足並崩さない  
嘘のある話しへ一人笑ひかけ  
賢夫人妾へもする贈り物

を開き同地知名の川柳家が十三人集まつたさうだ。句報は次號で發表する。

▼幹事の都合で暫く開けなかつた神戸支部の句會は彩霞君の骨折で九月九日に大倉山の安養寺で開いた。一洲君は差支て出られなかつた。句報は次に譲る。

▼啞人君は妻君の病氣で弱つてゐる。

▼蘆穂君は神經衰弱がスツキリしないのに脚氣になやまされ、脚氣がハツキリしないのに眼をわるくして弱つてゐる。これでは更に神經衰弱の度を加へるかも知れぬ。

▼古城山君も腸を悪くしてブラ／＼してゐる。それでも會にだけは出て来る。

▼松雨君も、からだかスツキリしないらしい。本社の柳珍堂忌には顔を出してくれた。

▼かくいふ僕も胃ミ頭を悪くして弱つてゐる。お互ひにモトデ(身體のこま)を大切にしないでほならない。

▼雅幽君は中々元氣だ。時々やつて来て

○

柳川洲馬

欄干で都の川を汚ながり  
 赤帽にお辭儀をされるい、旦那  
 誰れ彼れミ野心があつて纏まらず  
 村會へ袴を長うはいて來る  
 友仙の袖をまくるミ腕時計  
 執達吏一人は庭に立つて居る

武田彩霞

整澤な暮しに妾馴れて來る  
 もう駄目ミ聞いて信心の手を合せ  
 下痢をして好きな料理を見てすまし  
 天の川ばかり書いてる一年生  
 植木屋は枯れた不足を軽く受け  
 失業の亭主に惜しい貞女なり  
 子煩悩無理算段で着飾らせ  
 退院も近く病室の窓を開け

岩崎柳路

悪家主また原告になりすまし

は句に對する意見を述べたり、宣傳のためには、勤めたりしてゐる。頼母しいこまだ  
 ▼徹底郎君はまだ遊んでゐる。そして夏目漱石を戀人の様に云つて居る。ミ云つても金をウント抱いて遊んでゐる譯でないから、いいところがあつたら知らしてあげてください。なんでも出来る男です  
 ▼かほる君は餘裕綽々である、月見につきかお供が出来まへんかミか、先生この葉書いびつだんな、機械でこしらへたものでも、こんなのが出来るのやよつて面白うおまんアミ憎らしい程ひまさ加減を見せつけてくれる。徹底郎君これを見てあきれろ。  
 ▼夜調君は久しぶりに句を送つて來た。今後大いに作句して貰ひたい。二人目のお子さんが出来たさうだ。喜ばしいことだ。  
 ▼美の作君は川柳家の人格論を高唱してゐる。八月末に親戚に不幸があつて東上したが八日に歸阪した。

外堀の闇を彩ぎるボールの火  
急カーブ女が不意にもたれて來  
不渡を承知で出したことも言わず  
面會所女の低い聲がする  
納涼の氣分で運轉臺に立ち

○ 松本助六

枕あて今日も洗ふのを忘れ  
鬼も角も燐寸一遍振つて見る  
借金このこは花嫁まだ知らず  
成り行きに委せ不孝の續く事  
持参せば電話のほきも怒つてす  
抄らぬ勝に脚氣の今日も暮れ  
本店の丁稚わらそな顔で來る

○ 關本雅幽

手を取つて教へた事をもう忘れ  
雨乞ひへ素氣なく光る天の川  
ホネームン蟬に鳴かれて朝さなり  
紫も絞りも咲いて眼やにされ

▼零骨君は病氣に堪わずなやまされてるが句には相變らず熱心だ。

▼一聲君は遇うに相變らず元氣がいよ。

暑い間句の方は留守だつた。尤も仕事の方は、はたの見る目も忙がしいには違ひなかつた。これからやります云ふてゐる。

▼助六君は旺んに句會へ出席する。來月は平野郷で支部句會をやります腕によりをかけてゐる。

▼輝翠君は、何處の會でも、ひまさへあれば句會歩きをやつて、その熱心に驚かれてゐる。

▼柳路君は兵庫縣鳴尾、川柳雜誌御中いふ所判までこしらへ葉書や手紙へベタ／＼押して來る熱心さである。近々一寸歸阪するやうにいふてゐるから、日が判つたら歓迎句會を是非ひらきたいと思つてゐる。

▼花童子君も來春早々にやつて來るさうだから遠來の同人を迎へて大いに愉快な

それほきに喰ふさは見ぬ豚の口  
 故し鳥これから何處へ行くつもり  
 髭ばかりよく伸びます言ひ返し  
 順調に育つてニキビだらけなり  
 棚吊つてこれで我家ミいふ氣分  
 ブラジルも聞いては居るが粉煙草

○ 黒木 莢豆

此年齢で人におびゆる癖を持ち  
 油虫ツ命頂戴仕る  
 暇があり疊の蟻を手にかける  
 こほろぎに誘はれて行く酒の味  
 三尺の袂に思ひのたけをさけ  
 飛び散るは露かこみわた蝗なり  
 心からの水の音なり心なり

○ 宗清 夜調

露臺から見る日本は広いもの  
 裾ミ裾つかんでゾボン疊まりぬ  
 のぞく様にして出す女の電車賃

句會を開きたいと思つて今から楽しみにしてゐる。

本社九月句會

柳翁 忌

日時 九月二十三日午後六時

場所 大阪市南區清水町停留所西入

端の坊

兼題 「年寄」五句 路 郎 選

本社十月句會

日時 十月十一日午後六時

場所 大阪市南區清水町停留所西入

端の坊

兼題 「小説」五句 路 郎 選

會費 貳拾錢

句會に出席したくない人でも御遠慮なくいらつして下さい(幹事)

▼史風君は反對に九月の末に商用で北海道へ行くさうだ函館では同人の花童子君に逢うて來ます云つてゐた、僕に一緒に行かんか、とすゝめてゐたが僕には商用がないから困る行きたいには行きたいが▼二柳子君は相變らず本社の事務から支部の事務一切を切り廻してマナージャ振

襟を買ふのに連れの胸を借り  
行水と思はすふんぎし垣にあり

高橋古城山

取次の電話で仕立屋せかされる  
拘ねて居る姿を麻越しに見せ  
嫁づいてからへらだこの皮がこれ  
黽つてる様に晝寢の臍の繩  
庭掃いて見る氣にもなる日曜日  
太田徹底郎

教科書に悖る世間さわかりけり  
稍あつて他所の時計も一つ鳴り  
無聊さは爪が鉞にかゝり象ね  
秋が来たこゝはラムヲを飲み残し  
氣易さはこほれぬほぎに酌いで呉れ  
弟の届かぬこゝへ置いて寝る  
犬が吠ましやらうこゝ妾云ひ  
拜啓は煙草くわねたまゝで書き  
失職の身に大阪の狭いこゝ  
船頭はまだ揺れて居る歩き様

りを發揮してゐる。同人消息は「柳子君  
で打ち切りとする。

▼武笠山椒氏から原稿が来たので本號に  
のせました。今後何か書いて下さるこ  
こになつてゐます。読んで下さい。

▼西原柳雨氏からも「柳樽通釋の批評を  
讀みて」が届きました。川柳研究に熱心  
な武笠、西原兩氏の好意を謝します。

▼石井竹馬氏は十二支鷹でおわるいさう  
ですが選句に對しては實に忠實で病中  
かゝわらず、すぐ選稿を送つて來られる  
こゝろ状態です。

▼大正八年九月十四日に物故した松村柳  
珍堂の柳珍堂忌を社の都合で九日に営み  
ました。

▼垢抜けのした柳誌「きやり」が復活す  
るさうである。出来る丈けいゝものを見  
せて欲しい。購読希望者は東京市外南千

住町地方橋場一二六四塚越方きやり吟社  
▼俳風柳樽通釋及び漫畫漫文川柳ふんこ  
ろ手の割引を撤廢します(路)

# 震災のころ

駒井美の作

丸の内神々しくも崖が落ち  
十二階ボツキリ杖が折れた様  
避難民日比谷で鶴の味を知り  
焼け出され金春からで美しい  
丸焼は哀れ果敢なき鍵を持ち  
郡落ち女優ミ聞くも哀れなり  
由比ヶ濱大佛様は二尺逃げ  
天譴に壁だけ残る駿河町  
泉岳寺義士を起すに手間がきれ

所澤二百十日も有らはこそ  
軍艦に捕虜程乗せたにぎやかさ  
尋ね人二日目からは旗をたて

## 山本内閣

おいごんも貴公も無事な水交社  
見舞客おろすこ五六升も出し  
高塀のヒビに三井の奥が見ぬ  
蠟燭の灯で見た母の疲れ様  
被服廠跡ひろびろミ秋の風

——大正十二年九月作——



▼大阪一流の古本屋です。どんな本でもあります。

▼商賣にかけては掛引がありませんから安心です。

▼主人公藤堂氏は本の蟲の心持をよく知つた人です。

▼だからいろんな話をしながら愉快に本が見られます。

▼本をむさぼつて讀むころになります。

▼道頓堀邊へ御出かけのせつは是非立寄つてあげてください。  
(路郎生)

古

本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

# 公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南 五 六 二 番

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」に封筒に朱記すること。

▼締切は厳守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入のこと。

募 集

第一卷第十號課題

九月廿七日締切

(各題二十句以内)

- ▲日 和 矢野きん坊選
- ▲坂 相元 紋 太選
- ▲妾 宅 吉川啞人 共選  
龜井花童子

第一卷第十一號課題

十月二十五日締切

(各題二十句以内)

- ▲掛 取 岸 本 水 府選
- ▲山 安川 久流 美選
- ▲梯 子 高橋 古城山 共選  
柳川 洲馬 共選

每 號 募 集

- ▲近作柳樽(句數無制限) 麻生路郎選
- ▲各地柳壇(會報) 編輯局選
- ▲文章(評論研究吟行漫文)

價 定

一部 參拾錢  
六部 壹圓六拾錢(共稅郵)  
十二部 參圓

料 告 廣

特等一頁 拾拾圓  
普通一頁 五圓  
五號一行 壹貳圓  
壹貳圓

▼御送金は振替口座大阪三二五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます其の場合には御不在中でも頂けるやうに願ひますが但集金郵便には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は簡人宛にしない事

大正十三年九月十日印刷

大正十三年九月十五日發行

第一卷 第八號 (毎月一回十五日發行)

兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地  
編輯兼發行印刷人 麻 生 幸 二 郎

大阪市東區農人町二丁目七番地  
印 刷 所 藤 本 兄 弟 社

兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地

發 行 所 川 柳 雜 誌 社

振替大阪三二五一四番

賣 捌 書 店

(大阪) 明文堂 エミヤ 波屋 百足屋 田村 公立社  
(東京) 東 條 (京都) 三 宅 (神戸) 米 田  
(金澤) 石 井 (函館) 石 塚

# 川柳雜誌社同人 (いろは順)

主幹 麻生路郎

森田輝翠	酒井零骨	駒井箕作	柳川洲馬	宗清夜調	竹田蘆穂	高橋かほる	太田一聲	龜井花童子	橋本二柳子	岩崎柳路
關本雅幽	宮内一洲	麻生葎乃	松本助六	黒木莢豆	武田彩霞	高橋古城山	太田徹底郎	吉川啞人	西垣松雨	原史風

## 支部所在地

- 第一支部 大阪市内區八條通南小路 幹事 橋本二柳子
- 第二支部 大阪市外天下茶屋南下ノ森三五〇 幹事 森田輝翠
- 第三支部 大阪市外濱寺町羽衣二六一 幹事 酒井零骨
- 第四支部 大阪市西區鶴町四丁目十三號地嵐山方 幹事 關本雅幽
- 第五支部 大阪市南區瓦屋町四番丁松村方 幹事 駒井箕作
- 第六支部 兵庫縣武庫郡西灘村河原東五九〇 幹事 太田一聲
- 第七支部 大阪市外南濱一八二 幹事 西垣松雨
- 第八支部 神戸市旭通二丁目八三 幹事 宮内一洲
- 第九支部 山口縣山口町石原小路 幹事 柳川洲馬
- 第十支部 神戸市中山手通二丁目九五 幹事 武田彩霞
- 第十一支部 東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内 幹事 岩崎柳路
- 第十二支部 函館市青柳町五〇 幹事 龜井花童子
- 第十三支部 大阪市外平野郷梅ヶ枝町五丁目 幹事 松本助六

(會計)一聲(廣告)莢豆(寫真)

麻生路郎氏著（柴谷柴舟氏畫）

# 漫畫 川柳ふところ手

四六版 二百餘頁

定價 金壹圓廿錢

送費 金八錢

これは川柳懷手の改訂版です。懷手は川柳家以外の人達にまで面白がられて直ぐに賣切れてしまつたのです。「懷手」はもう出ないのですかよきかれるので今度田村書店から出すことになりました。本屋の方からの希望もあり漫畫 川柳ふところ手 さいふ長い名になりました。そして裝幀もすつかりあらたまり、四六版になりました。是非御一讀を煩はします。（著者）

取次

兵庫縣武庫郡鳴尾

川柳雜誌社

振替大阪三二五一四番